

平成 11 年度研究功労賞推薦書

受賞対象者 堀 浩 先生

堀浩先生は昭和 15 年大阪帝国大学医学部を卒業されるとすぐ、医学部外科学第一教室に入局され、外科医としての第一歩を歩まれました。折しも軍国華やかなりし時代であったため、同年 10 月より陸軍短期現役軍医として入隊、引き続き出征されることになりました。昭和 23 年 3 月 31 日、大阪大学医学部に復員されましたが、当時、外科学第一教室の小沢凱夫教授は、てんかん患者の外科治療に情熱を持っておられ、その命により堀先生もまたてんかん研究への道を歩まれることとなり、必然的に新興の脳神経外科学へ進まれたと聞いております。昭和 31 年 Marseille-Aix 大学(フランス)に留学され、Gastaut 教授の元で脳波学、また Parillas 教授の教室で脳神経外科学の研鑽を積まれた後、昭和 35 年 1 月、奈良県立医科大学に新設された外科学第二講座の主任教授に任命されました。教室の研究方向は、堀先生が大阪大学およびフランスでなされていた脳波学・筋電図学など神経生理学を基礎とする脳神経外科の研究に向かうものとなりました。堀先生が在任中になされた研究は多岐に亘っておりますが、大半はてんかん関連領域で、脳波学に関しましては diffuse alpha pattern, irritable beta pattern, alternative spindle, prolonged spindle, α 波の reapperrance time 等、様々な新しい脳波パターンの提唱とその意義付けに関する研究、筋電図学に関しましては反復誘発筋電図法の開発とその応用を始め、F 波・S 波の研究などが挙げられます。そして、こうした研究に併せるように"脳波は我々.に何を教えるか"(臨床脳波第 6 巻特別号・永井書店)、脳波の臨床教室(大日本製薬株式会社)、筋電図の臨床教室〔平和電子工業)、筋電図の手引き(南山堂)などの著書を出され、いろいろな分野で若い医師に脳波、筋電図の臨床的な有用性を説かれました。

先生はまた有能な脳神経外科医でもありました。従いまして、神経の外科的疾患は全て治療の対象となりましたが、とりわけ難治性てんかんに対する外科的治療への情熱には強いものがありました。当初は時代の背景もあって、ステレオ手術手技によるてんかん惹起性インパルスの伝導路を遮断しようとするものでありました。動物実験による膨大な研究も同時進行的に行われたことは言うまでもありません。先生は早い時期より、てんかんが"神経細胞群の hypersynchronizatio"であるとの考えをもたれ、焦点切除に外科的治療の主眼を置かれると共に、その病態解明にも情熱を燃やされました。このてんかんの病態研究から派生したものとして、二次的狭頭症の外科治療に関する研究があります。脳性小児麻痺のため、infantile spasm やけいれん発作・痙性麻痺を有する患児の 5 人に 1 人は、狭頭症的病態になっていることを見出され、その鑑別法と新しい積極的頭蓋開大術を開発されました。当時は学会で大変な注目を集められました。その他、頭部外傷や脳血管障害およびその後のてんかん発症などに関しましても多くの業績を残しておられます。

学会活動に関しましても、多くの学会での要職を勤められ、会長として主催もされました。てんかん関係では、日本てんかん学会の前身である日本てんかん研究会の発足に際し、設立発起人の1人として尽力され、また当初より昭和56年9月まで幹事・監事としてその運営に貢献されました。そして、昭和52年には第11回日本てんかん研究会を主催され、昭和60年には名誉会員に推挙されておられます。

以上のように、神経生理学、脳神経外科学の学者として、てんかん学の発展に多大の貢献をなされました。一方で、臨床教室の主任として素晴らしき臨床家でもあり、てんかん研究に興味を持つ多くの弟子達を育てられ、研究者としての厳しさと同時に人に対する優しさを身をもって教えられました。先生が外来診察をされる日には、多くの患者さんが朝早くより診察を待っておりました。そして、全ての患者さんに、本当に心優しく接しておられるのが、ほんの昨日の如く思い出されます。

奈良県立医科大学 教授
榎 寿右